

金沢大学附属図書館創作短歌フェス2025

学生特別賞

・人間社会学域「国語科教育法」の受講学生が作品の鑑賞を行い、特に共感を集めた3作品です。
入賞作品に対する返歌は、受講学生により創作されました。

入賞作品	返歌
冷え込んだ空気に文句を言う私そのぶん星が綺麗と言う君	文句を言う君の冷えた手握りつつ宙に描くは冬の三角
	冷え切った私の右手を包み込み自分のポッケに入れてくれた君
	寒いなか星が綺麗という君に一步近づき月が綺麗よ
	赤い頬緩ませながら笑いあう君とみるから綺麗なんだよ
	星を見てかじかんだ手をさする君「手をつなごうよ」と言えなかった僕
	星光る寒空に吐く白い息微笑む二人に吸い込まれてく
	愛おしい文句言ってる君ですら世界でいちばん綺麗な星だよ
	ふたりきり星が瞬く空の下花火は星より綺麗なのかな
	春らしい空気に鼻歌歌う君その分花粉がという私
	ありがたい新しい考えくれる君まるであなたは綺麗な星だ
	水無川見上げて綺麗という貴方薄暑の夜が苦手な僕と
	空見上げ星が綺麗という君を横で見つめた最後の季節
使用済み電池が並ぶ棚の上一人暮らしの弾薬庫かな	月曜の資源ごみの日来るまでは埃かぶりて休戦協定
	棚の上役目を終えて早二年じっと見守る家主の実態
	積み上げた電池の棚のすぐそばに絡んだコード導火線のごと
	電池切れ買い足し忘れて思い出すどれかはつきそう淡い期待で
	飲みかけのペットボトルが並ぶ床一人暮らしの無法地帯かな
	飲みかけのペットボトルが並ぶ床準備は出来たミサイル発射
	私もね自分の部屋を思い出しあぁやらなきゃとあせる毎日
姉の背を超え母の背を超えてなが一番下の引き出しを引く	気が付けば私と母を超す背丈それでもずっと我が家の末っ子
	末っ子をいつのまにか見上げて嬉しさもあり悔しさもあり
	いつの日か見上げるようになった君もうそんなところも届いてしまうの
	今ならば一番上の引き出しを引いて見せよう末っ子パワー
	家族の背超えてもいまだ超えられぬ家族間でのヒエラルキー
	かがみ込むその背の丸みあの日ごと小さき君に戻る一瞬
	厚底でごまかす背丈寂しくていつまでたっても姉でいたい
	いつのまに見上げる娘さみしさでも呼び方は「ママ」のままで
	母の背も手の大きさも超えたとして向ける笑顔はあの頃のままだ
	気づいたら見上げる側になっちゃった変わらないのは年の差だけね
	最近腰が痛んでダメなのよだから私は一番上よ
	しょうがない着る服ないの貸してよね手を伸ばすのは一番下の